

あなたの生活に 文学を

阿部 公彦

さくできています。人間はス
トレスや摩擦と無縁ではいら
れない。

小説はわざわざそんな「面
倒くさい」を描くジャンルで
す。悶着や葛藤が花。しか
ただでなく文章そのものが特
有のわかりにくさや抵抗感を
持つ。

す。そのせいもあるのか、彼
女は次第に観察の人となる。
「近所の人間関係をのぞき、
ときには「目だけになって、
自分の握っている鉛筆が描き
出す線になる」「ただ眼球が
見たものを見たまま描く」。

作品の世界は、まるでこの
七聖の眼球の滑走ぶりを追う
ように展開します。細部の一
つ一つのパーツが、背景から
切り離されて浮遊。おかげで、
七聖が父親の変態写真の被写
体になったり、病院で無理や
り性器の検査をされ半狂乱に
なったりする場面や、妹の千
由が性被害に遭う事件の、そ
の想像を絶する異様さがわか
りにくいまま突きつけられ
る。

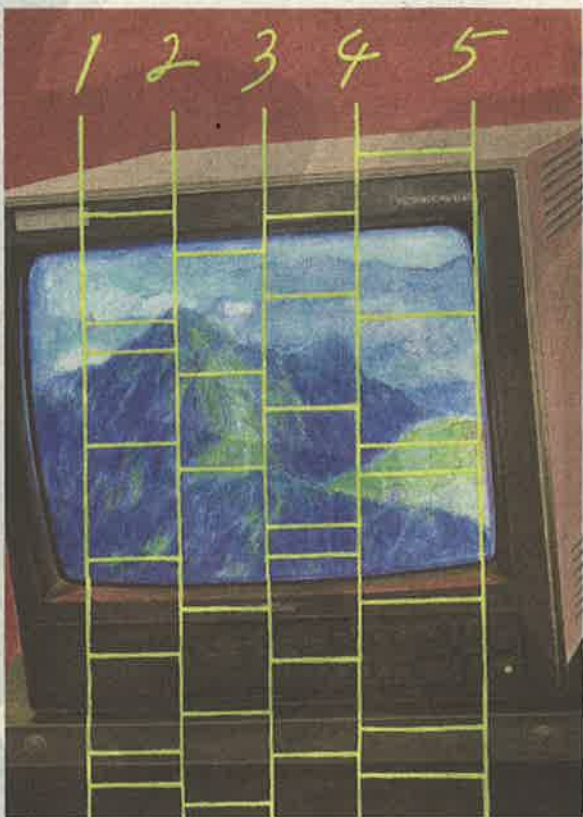
今月、「面倒くさい」で群
を抜いていたのは三国美千子
さんの「青いポポの果実」
（「新潮」12月号）でした。

一見すると、子供を主人公に
した牧歌的な日常風景です
が、どことなくギクシャクし
ている。あちこちで「あれ？」
と読み間違え、目眩にさえ見
舞われます。

主人公の七聖は自分の中の
「雌」に違和感を抱き、男の
子のように振る舞っていま

安易な理解を控えること
で、やっと受け止められる
「傷があるようです。でも、
嫌なことばかりではありませ
ん。七聖と隣人の麻子との間
に生じる女同士の関係もまた

嫌なことばかりではありませ
ん。七聖と隣人の麻子との間
に生じる女同士の関係もまた



絵・片山高志

わかりにくさが救いに

三国美千子「青いポポの果実」

わかりにくい。でも、それは
救いをもたらします。

面倒くさい文章と言えば、
保坂和志。真打ちです。「夜
明けまでの夜」（「文学界」
12月号）ではそれが至高の輝
きを放ち、ため息が出るほど
の美しさを生みます。

作品内で起きることはごく
わずか。生まれたばかりの子
猫が2匹死んだという。それ
をいかにも保坂的な、読点を
多用したシンプルだけど切れ
目のない文章で描く。

読者にとつては負担になる
書き方です。語尾が不安定な
ので、由つりにされたような
未決定感がある。ヨーロッパ
言語の用法で言えば接続法に
近い。「ありましたー」と言
い切るのではなく、「ありうる」
「べき」といった可能性の列
挙で話が進むのです。

何だかじれたい。でも、
これは意味のある負担です。
由つりのおかげで2匹の猫の
死は過去への想いにつなが
り、さらにはベルクソンやド
ウルーズの思想を介して「過
去は現在と並行して在りつづ
ける」という考えを引き出し
ます。このごく短い作品に、
生命と死にまつわるさまざまな
思いが、入れかわり立ち替
わりまぶしい閃光のように現
出するのです。

「命は死に出会うたびに考
えるように人にしむける、人
は出会わない死には注目も傾

保坂和志「夜明けまでの夜」

宙づり感に至高の輝き

聴もしない死まで考えを伸ば
すことを命は求める……語り
手はこんな思弁の果てに一つ
のヤマ場にとり着きます。

「考えは自分のものでなく他
人のものである言葉で構成さ
れるから正しいと感じる、正
しさは自分の中でなく外にあ
る、外とはごごなのか、自分
の中のどの部分が外なのか」
なるほど。保坂さんの文体は、
自分の言葉を外からのものに
ように受け止めるための試み
なのかもしれません。

李琴峰さんの「星月夜」
（「すばる」12月号）は、日
本で日本語を教える台湾出身
の女性、柳を主人公とした作
品。日本語を外国語として、
日本を外国として見る視線が
ベースにあり、言葉の不自由
を土台のところまで掘り下げ
ていきます。しかし、そこか
らむしろ日本語のおもしろさ
や美しさの発見もある。

作品では柳の語り、同性
愛者の彼女が関係を持つウイ
グル出身の王麗の語りとが並
走します。やがて2人の間に
日本人女性が現れて三角関係
が生じ、柳は苦く辛い事態に
直面する。文章は決して面倒
くさくなく、むしろ読みやす
いといえますが、物語ともど
も、不協和音のタネをたくさ
ん潜ませる。とくに日本語を
十分に使えない自分を柳が
「一級市民」と呼ぶその不安
感が、作品全体にトゲのある
緊張感をつくっています。野
心的な作品です。

（英米文学者）